

幼児の道徳性の形成に関する一考察

—L. Kohlberg 理論を通じて—

鈴木 孝・福崎 淳子**

(昭和62年9月29日受理)

A Study on the Development of Morality in Pre-school Children

—Based on the L. Kohlberg's Theory—

Takashi SUZUKI and Junko FUKUZAKI

(Received September 29, 1987)

はじめに

Kohlberg の道徳論において重視されている点のひとつは、「結果的にどう行動するかではなく、どうしてそのような結果を導き出したかの思考過程」¹⁾である。ある問題に対しどうすべきかを考える過程は、一人の人間のかかわってきた環境によるところが大であろう。岩井²⁾も「子どもの道徳性の形成に子どもの生活環境の影響が大きいことはいままでもない」と述べているが、特に幼児期の生活環境は、ある行為に対する判断を導く上でのひとつの解決要素として、大きな影響をもつものと考えられる。たとえ同じ行為であったとしても思考過程を重視した場合、意味が違ってくる。結果的に同じ行為であっても、内面の“考える姿勢”の中に道徳観の違いが生じるのである。Kohlberg はこの内面の姿勢を重視したのである。では、考える姿勢を育てるといふ側に視点をあてたとき、子どもの道徳性の形成にかかわる親—おとなの行為の中で、おとなの思考過程がいかに重要かを考えねばならないであろう。結果的に「こうしてほしい」とする行為を導くに至るまでのおとなの教示のし方により、同じ行為であっても子どもの考え方、見方の姿勢の違いが生じるであろう。

本論では、幼児期の道徳性の形成にかかわる環境的な問題点を、Kohlberg の道徳論を通じ考察したい。

[I]

* 教育哲学研究室

** 日本女子大学児童学科研究室

1)

道徳性の発達段階について、岩井³⁾は「道徳性は無道徳な状態から他律的・形式的・外面的などといえる段階を経て、自律的・合理的・内面的などといえる段階へと発達していく」とまとめている。Piaget 理論も自己の欲求に基づいた道徳性から自律へと向かって発達するのであり、Kohlberg もこの Piaget 理論を受け継いで6段階の道徳性の発達を述べている。Kohlberg の示した6段階は前論⁴⁾で詳しく紹介しているので本論では省略する。

山岸⁵⁾は Kohlberg の道徳性の発達段階と他の発達段階との関連を表1のようにまとめている。これらの発達段階は、認知発達・精神性の発達などとの関係から、ある程度の年齢的な対応が考えられる。

Denney らは Kohlberg の発達段階を分析し、「子どもの年齢が高ければ高いほど道徳判断の水準も高い」⁶⁾との見解を示している。一方 Kohlberg の考え方として前論において「一定の年齢と発達段階が必ずしも対応しない場合のあること」⁷⁾が考察されている。確かに年齢的な発達に伴ない精神性も高まるはずだが、高い精神性の獲得は単に年齢的なものだけとはいえないであろうし、知的水準が高いからといって道徳性も高いとは限らないであろう。Kohlberg 自身も「認知の発達段階と道徳性の発達段階との間に一対一の平行論あるいは同型論が成立する。しかし、この状態は実証的に高い相関関係あるいは完全な相関関係が二つの間に存在することを意味しているのではない。一略—道徳的な理由づけを行なうためには、認知的に成熟(知能が発達)していなければならない。しかし、頭がいいからといって道徳

表1 Kohlberg の発達段階と他の発達段階との関連

(山岸, 1985)

道徳性 (Kohlberg)	認知能力 (Piaget)	役割取得能力 (Selman)	自我発達 (Erikson)
第0段階 自己の欲求のみに基づく道徳性	象徴的直観思考	第0段階 自己中心的視点 (自他の視点の分化なし)	
第1段階 罰と服従への志向	具体的操作 下位段階1 (カテゴリー分類)	第1段階 主観的または対人的情報に関する役割取得 (人の主観性, 人による情報の異なりを理解する—自他の視点の分化—が, 自他がお互いを主体と見ることはわからない)	
第2段階 道具的快楽主義的志向	具体的操作 下位段階2 (可逆的操作)	第2段階 自己内省的 (self-reflective) 役割取得 (自他がお互いを主体と見ることに気づくが自他の視点の関連づけは継時的で同時的には関連させられない)	
第3段階 対人的一致 「よい子」への志向	形式的操作 下位段階1 (形式的操作の開始)	第3段階 相互的役割取得 (自他の視点を同時的相互的に関連させられる)	
第4段階 法と秩序の維持への志向	形式的操作 下位段階2 (形式的操作の初期)	第4段階 社会的慣習的システムの役割取得 (集団の成員全体や一般的他者の役割がとれる)	与えられた同一性の受容
第5段階 社会契約的法への志向	形式的操作 下位段階 (完成・定着)		同一性の危機またはモラトリアム (第4½段階に対応)
第6段階 普遍的倫理的原理への志向			自我同一性の達成

的な理由づけが行えるとは限らない⁸⁾と述べているのである。岩井も前述のように道徳性の発達をまとめてはいるが、次のような辛辣な批評をも述べている。「乳児期や幼児期の段階については比較的納得しやすいのであるが、青年期のあたりになると、なんとなく現実離れた抽象論や理想論と感じたりする者が多いようである。一略一第一に青年期や成人期になったからといって、自律的、合理的、内面的などの道徳性を身につけるようにならないのではないか、という疑問がある。もしそうなるなら、この世の中はもう少し住みよくなっている筈である⁹⁾と。

Kohlberg は、おとなであっても低い段階の道徳判断を行なう者も存在するし、逆に年齢的に低くとも高い段階の道徳判断を行なえる者も存在すると考えている。年齢的尺度によらず、質的解釈そのものによって発達段階をとらえていることは重要な点である。この点は、彼が行為ではなく判断にかかわる“思考過程”を重視して

いるからこそ生じる解釈なのであろう。

発達とは、ある段階での考え方だけでは十分に解釈できなくなったとき、コンフリクトを生じながら現段階での考え方が新しい段階での基礎となって、より高く前進していくという価値的な立場から考えることができるであろう。年齢的に高いということは、それだけ多くの刺激を受け学習しているはずであり、質的水準が高くなるはずなのであるが、必ずしも過去の学習経験が質的向上につながらない側面をもつところに、人間社会の複雑さがあるのだろう。特に、道徳性は高い段階に進むほど抽象性を極め、単純な一本の道筋では示せなくなる。

幼児期は前述の岩井、山岸のまとめた道徳性の発達段階において、無道徳的な状態から他律的へ、自己の欲求のみに基づくゼロ段階の道徳性から、Kohlberg の第1段階〔罰 (punishment) と服従 (obedience)], 第2段階〔道具主義的 (instrumental) 目的 (purpose) と交換 (exchange)] へと進んでいく。生活範囲が家

庭から外へと広がり、幼稚園・保育園などで友人とふれ合うことにより共同生活の中での対人関係が生まれる。こうした環境の中で無道徳的な状態から、あるいは自己の欲求のみに基づく道徳性から、精神性の発達とともに高い道徳性の段階へと進んでいくのである。

このような生活空間の広がりによる環境も、幼児の道徳性の発達には大きな要因をもたらすものと思われる。菊池¹⁰⁾の示した道徳性の形成にかかわる生活環境の図1

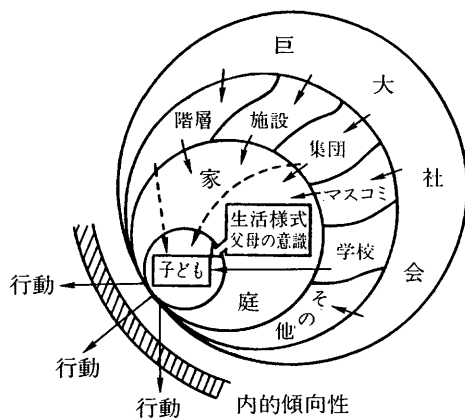


図1 道徳性の形成にかかわる生活環境 (菊池, 1965)

からも同様に解される点である。こうした背景の中で子どもは「環境に積極的に働きかけ、環境を変えていく存在でもある¹¹⁾。子どもは刺激を受けるだけではなく自らも刺激を与えている存在でもあると考えられる。

福岡¹²⁾は「強さ」に対することばの解釈の中に、「援助・忍耐力」を意味する道徳的価値観の加わった反応が5才児にみられたことを報告している。「強い」「弱い」ということばに対するイメージとして、一般的に4・5才児は量的な力の強さによる判断や勝敗に重きがおかれているのだが、5才児の中には「いじめられているときに助けてあげること」「がまんでできること」「小さい子にはやさしく、悪いことをしない」ことが強いことを意味するのだと解し、社会性の発達にかかわる点をあげている。対人関係の中から本当の強さは量的な力の強さではないことを、互いの刺激のやり取りにより学習しているのである。これは一方向的な受動的刺激だけでは成立しえないであろう。

2)

菊池¹⁰⁾の示す生活環境からもいえるように、幼児の道

徳性の形成には家庭の役割が大きい位置を示している。子どもと生活様式・父母の意識との間が直接的な流動性をもつつながりで図式化されているのもそのためといえよう。Denney ら¹³⁾は、母親と子どもの道徳観に関し、母親が自分の子どもの盗みの行為をみた時、子どもに対し使う道徳的理由の段階と子どもの判断について、Kohlberg の発達段階別に分析した結果、母親と子どもの道徳観には相関のあることを報告している。親の価値観は子どもに与える影響が大きいといえる。Kohlberg が思考過程を重視した点を考えると、母親のものの考え方に注目する必要性を感じる。単に結果的なものだけではなく、「どうしてそうすべきなのか」ということが大切になってくる。たとえば、あるネガティブな行為に対し、叱るという罰を与えることによりやめさせるのか、その行為が何故いけないのかを説明し、母親の倫理性としてそれは認められない行為であることを示した上でやめさせるのか、同じ抑制への教示だとしてもそれは全く思考過程の違う教示である。Kohlberg の段階からいえば、前者はあきらかに第1段階の道徳性であり、低い思考過程—判断力を幼児に示したことになる。これによって形成される道徳性が、第1段階以上になり得ることは難しいことである。後者は教示の質的内容の深さにより多少の差は生じるが、少なくとも第3段階以上と考えられる。この教示により幼児の思考回路にはあきらかに、“考え方”のひとつの姿勢が築かれていくであろう。

Kohlberg の発達段階は年齢が高ければ必ず高いといえない点を前に述べたが、発達段階の低いおとなによる幼児への影響力を思うと、常に自己をみつめていこうとする倫理への追究を忘れてしまった時のおとなの姿勢に、ある種の危険さを感じるのである。

3)

Carter, R. E. は「Kohlberg にとって教化的なやり方での道徳教育は、子どもの道徳的自由の冒瀆 (violation) である¹⁴⁾と述べており、Kohlberg 自身も「援助者」としてのおとなの姿勢を大切にしなければならない点を強調している。

では、援助者という立場でのおとなのあり方について考えてみよう。まず最も近い関係にある親子間から論を進めよう。母親と子どもの道徳性に相関のあることは、Denney ら¹³⁾の述べているところである。石橋も道徳意

識の形成に関し母子関係の重要性を次のように述べている。「子どもの道徳意識も、ただ人間の社会にいればおのずと形成されていくのではなく、幼児期における母と子の自然な生活の中で芽を出し、育まれていって始めて真実のものとなる一略一乳幼児との日々の生活における母親の心づかいがあらわれる時、子どもの内的感情や情操は育まれていくのである」⁶⁵⁾ 父親との関係については、Holstein の結果によれば相関のないことが示されていると山岸⁶⁶⁾は紹介している。母親は生活空間の中で子どもとふれ合う場が多いということによるのかもしれないが、Denney らは直接的な要因は述べておらず、経験を通じ母親から道徳性の判断を学びとっているとし、二者間のかかわりの重要性を述べている。母親は母親であると同時に女性でもある。では女性という視点ではどうだろうか、山岸は Kohlberg 理論を批判した Gilligan の見解を次のように紹介している。「女性の道徳判断は「何が正しいか」に基づくのではなく、他者への共感や同情の感情に基づいてなされる」⁶⁷⁾ 「女性は、社会秩序や社会的合意、あるいは普遍的な原理というような形式的、抽象的な解決でなく、文脈に依存し (context-relevant) 具体的状況にそった形で、かかわりをもつ他者に責任をもつという観点から解決を求める」⁶⁸⁾。こうした解決の中で第3段階の反応が女性に多いことを指摘している。

男性とは違う見方で道徳観をとらえているとするならば、女性である母親の影響を強く受ける子どもはどうなるのであろうか。対人関係に重きをおく第3段階の道徳的思考型が多くなることになってしまう。だが一方的なおとなの姿勢—刺激のみが幼児の道徳性の形成にかかわるのではないことにも注目すべきだろう。「子どもの能動的な行動が子どもの道徳性の形成に大きな役割を果たしていることも見逃せない」⁶⁹⁾と岩井が述べているように、子ども自身の内部にも、自らの力でぶつかりはねかえってきた刺激により造り出されていく思考過程がある。その意味で菊池の示した道徳性の形成の図式において、外から子どもへ向けられる影響力としての矢印だけでなく、子どもの側からも環境へむかって進む矢印を示したいと筆者は考える。同時に、あるおとなへの“疑問”を感じるのである。それはおとなの egoism であるかもしれないが、おとなは自分自身への道徳的問いかけと子どもに対するしつけという立場からの道徳的問いかけに、無意識のうちに質的違いを生じさせていることがないだ

ろうか。こうすべきだという観念と自分自身の行為とが必ずしも一致していない現実があるのではないかということである。もしそうならば、真実の道徳性は形成されず、見せかけの道徳性が社会に氾濫し、虚実の狭間で戸惑う姿が子どもの中に生まれてしまうことになる。岩井⁷⁰⁾は「教師みずからが子どもとともにあゆみ苦悩することが、子どもたちにより影響を与えるのである。人間としての苦悩する姿が子どもの心に感動をひき起こすのである」と述べているが、この「感動」ということばの中に幼児の道徳性の形成に大きなかかわりをもつ要因が含まれているのではないだろうか。岩井はさらに「おとな自身が自分の道徳性を柔らかく保つことこそ、その出発点ではないだろうか」⁷¹⁾と考えている。この「柔らかさ」と「感動」が幼児の道徳性の形成に大きな力を及ぼすものと筆者は考える。確かに幼児の道徳性の形成に母親の影響力は大きいであるが、一方的な親のみの力により形成されるとすれば、それは親自身の狭い見解の反映であり、子どもにとっては Carter の指摘する冒瀆行為そのものになるであろう。子どもの育つ生活空間の広さを考えるとき、その広い環境の中からひとつひとつの刺激を受けて形成される道徳性に、一対一で対応させるような要因はないのではないだろうか。それだけに小さなおとなの見解がどれほど大きな影響力を及ぼすかの危険性も含んでいるのである。常に複雑にからみ合いながら、あるときは逆もどりすることもくり返ししながら、精神的な意味での高い道徳性が育っていくのだと考える。その意味で、おとなも環境の中のひとつの刺激としての要素なのだと考えてはどうだろうか。だからこそ、Kohlberg の述べる援助する姿勢の大切さがおとなに強調されるのではなかろうか。自己の内部で思考しながら本来の人間の姿勢を追究しつつ形成される自主的な姿であるべきものと考える。そしてともに苦悩することも自己の追究があるからこそ生じるものではなかろうか。Carter⁷²⁾が教化的なやり方は子どもの道徳的自由の冒瀆と主張しているのもそのためではないだろうか。自然的環境と物質的環境の中間にあり、常に二者の環境の釣り合いを保つ精神的“要”としておとなは存在し、けっして子どもを見おろす位置にいないことが大切なことではないか。と考えるのである。「こうすべきだ」ではなく、「私はこう考えるがどうか」という問いかけの姿勢が大切なのではないだろうか。

〔Ⅱ〕

前述の Kohlberg の道徳発達論はまことに経験的に思索され、可塑性に富んだ推論から生まれたものであろう。Kohlberg 自身は、彼のいう「発達段階」は不変なものであり、文化圏の如何に関係のないものともいう²⁹⁾。彼が、認識の葛藤から次の段階へと移るのを克明に記述した功績はいうまでもなく偉大なものであろう。また彼の子どもたちへの気持、その道徳性への追究心は正に彼の生い立ち、彼の人格からほとばしるものともいう²⁹⁾。

一言にしていえば、Kohlberg の理論は、「学校における道徳教育計画への基礎的なガイダンス」である。彼の発達説も多少の修正を経ていることはいうまでもない。たとえば、Hoan の両親論、Juriel の「段階相互論」または「中間作用論」などである²⁹⁾。しかし本論では〔Ⅰ〕で指摘されている学習経験と道徳水準の相関説について考察を進めたい。そこでは「必ずしも過去の学習経験が質的向上につながらない側面をもつところに、人間社会の複雑さがあるのだろう」とある。これはすでに子ども社会の認知のみにかかわらない、重大な視界を暗示するものかも知れない。また、上記の認知と道徳性の相関性への疑問はそのまま大人にあてはまるのではないか。認知的、量的思惟にすぐれた故に人間不信の背徳への道を歩む理性の奸計は人口に膾炙する事実であるといえよう。たとえば、ユダの如くに。

もとより、Kohlberg の道徳発達説は子どもの発達への仮説として可能であるが、ただ、子どもの発達を子どもまわりの、つまりは、人間(友人とか親)のみにかぎることは至当とはいえ、道徳性を限局してはいないだろうか。前論に述べた図²⁹⁾での、出発としての Self と最終の Cosmos as a totality の相関への問いかけである。人間相互関係は発達、発展した社会になるほど功利的側面は強くなっていくであろう。この次元ではどのような道徳性も功利への不信をぬぐい得ないであろう。

すでに子どもの発達は道徳以前なるものとの相関を無視しえないのではないか。Kohlberg に最も欠けた Dimension ははしなくも最も身近かなものである。それは人間を達成しえた環境、つまり、自然である。それは James のいう「意識の流れ」の最深部に働きかけて、作用しているはずである。自然という存在を無視してまでも人間相互の道徳が成立するというのは早計であり、近視的である。ここでは、Herbert Read の一文を引

用して考察のモメントに供したいのである。「私の人生に響きあうもの、それはずっと子どもの頃のもののなのだが、それは数しげく、とても意味なきものとすてさることはできない。エコーとしてひびいてくるものは、多分、それは私の意識された人生であり、唯一の真実の経験は水々しい感覚とともに生きていたあの頃のものである。つまり、私たちは、かつてひたすらにあの音を聞き、あの色を見、まさしく一度のみに、そしてはじめにすべてを見、聞き、触れ、味わい、かきわけたのである。すべて人生は、われわれのはじめの体験のエコーなのだ」²⁶⁾。

以上 Kohlberg の道徳的発達論を通し、幼児の道徳性の形成にかかわる環境的問題を、複雑な社会の中に存するわれわれおとなへの問いかけとして、その姿勢から考察した。

註

- 1) 鈴木孝・福崎淳子：Kohlberg 理論における道徳性の発達に関する一考察— R. S. Peters および W. James を通じて—, 東京家政大学研究紀要, 27 45 (1987)
- 2) 岩井勇児：道徳性の発達, 児童心理学講座 7 (岡本夏木他編), 金子書房(東京), 1978, p. 203
- 3) 同上 p. 193
- 4) 鈴木孝他：43—51 (1987)
- 5) 山岸明子：コールバーク理論のその後の発展, 道徳性の発達と教育(永野重史編), 新曜社(東京), 1985, p. 196
- 6) Denney, N. W. & Duffy, D. M. : Possible Environmental Causes of Stages in Moral Reasoning, *The Journal of Genetic Psychology*, 125 282 (1974)
- 7) 鈴木孝他：47 (1987)
- 8) Kohlberg, L. : From is to Ought, How to commit the naturalistic fallacy and get away with it in the study of moral development, In Misfel, T. (Ed), *Cognitive development and epistemology*, Academic Press, 1971, 内藤俊史訳：「である」から「べきである」へ, 道徳性の発達と教育(永野重史編), 新曜社(東京), 1985, pp. 56—57
- 9) 岩井勇児：p. 193 (1978)

- 10) 菊池幸子：子どもの道徳性の形成と環境，現代の道徳教育 I，（宮田丈夫他編），明治図書（東京），1965
- 11) 岩井勇児：p. 204（1978）
- 12) 福崎淳子：幼児の音の知覚と言語に関する研究，日女大紀要（家政学部）34 21（1987）
- 13) Denney, N. W. & Duffy, D. M. : 125 277—283（1974）
- 14) Carter, R. E. : Dimensions of moral education, University of Toronto Press, 1984, p. 55
- 15) 石橋哲成：子どもの意識，子どもの生活（本間真宏編），相川書房（東京），1984, pp. 52—53
- 16) 山岸明子：p. 201（1985）
- 17) 山岸明子：コールバーク理論の新しい展開—主としてギリガンの批判をめぐって，道徳性の形成，（永野重史監訳），新曜社（東京），1987, p. 195
- 18) 同上 p. 197
- 19) 岩井勇児：p. 204（1978）
- 20) 同上 p. 209
- 21) 同上 p. 216
- 22) Downey & Kelly : Moral education, Harper & Row 1978, p. 80
- 23) Clark Power, : Kohlberg 追悼講演，道徳教育国際会議，モラロジー研究所（千葉），1987
- 24) Downey & Kelly, : pp. 82—83（1978）
- 25) 鈴木孝他：46（1987）
- 26) Read, H. : The Contrary Experience, Faber and Faber 1963, p. 17